

# 江戸絵図から東京の原景観を探る

工学博士 清水英範

(東京大学教授  
大学院工学系研究科社会基盤学専攻)

## 都市の根源的な個性とは

いま、都市は競争の時代であると言われています。

東京は、パリやロンドン、そして上海やシンガポールと競争です。その他の都市だって同じことです。ライバル都市との競争の時代です。

この競争の時代にあって、都市は何を武器にして生き抜いていくのでしょうか。最も強く個性的なもの、根源的なもので勝負しなければ競争には勝てません。では、都市の根源的な個性とは何でしょうか。

私は、その重要な柱は、都市の原地形であり、原景觀であると思っています。他の都市には絶対に真似のできない、根源的な個性と言えるものは、結局のところ、大自然が築き上げた地形であり、その地形が創り

景観しかないと思うからです。

人間は、親から授かった身体、知恵、そして倫理観—こういうものを大切にして、後は自分の努力で頑張って成長していきます。都市だって同じことのように思います。母なる大地、天賦の大地、そこから授かっただ生活や都市づくりの知恵、都市とは何かの倫理観—こういうものを大切にしなければなりません。

この大切なものが凝縮されているのが、都市の昔の地形であり、昔の景観、すなわち、都市の原地形、原景觀ではないかと思うのです。

では、都市の原景觀をどのようにして探っていくましょうか。  
残念ながら、極度に過密、立体化してしまった現代の大都会において、その原地形、原景觀を探るのは容易なことではありません。ましてや、大都会に集う多種多様で大勢の人々



が、それを知識として共有すること  
は容易なことではありません。

私が大学に入学して東京に出てき  
ましたのは昭和五十三年です。それ  
まで、そして、東京に来てからもし  
ばらくは、東京は平坦な都会である  
と思っていました。東京に出張で来  
られる方々も、多くの方はそのよう  
な印象をお持ちのようです。

ご存知のように、東京の山の手、  
港区、新宿区、文京区のあたりです  
が、このあたりは、武藏野台地の古  
い地形が広がっており、河川浸食によ  
つて、山あり、谷ありの険しい地  
形が創られました。

これらの地形は、明治以降の都市

整備や道路整備によってかなり改変  
されました。しかし、地下鉄を利用して  
います。それが分かりません。自動車を使  
つても基本的には同じです。幹線道路は尾根線や

谷線をうまく使って作られています  
ので、出張で来られた方がタクシー  
を利用されても、東京の急峻な地形  
を実感しにくいのです。

ご存知のように、渋谷という街は  
その名通り、道玄坂と宮益坂が対  
峙する、大変急峻な谷地形の中に發  
達した集落です。しかし、いま渋谷  
の街を闊歩する若者たちは、果たし  
て渋谷が「谷」であることを意識し  
ているでしようか。そこに、唱歌

「春の小川」に詠まれた美しい水辺が  
存在していたことを、一体どれだけ  
の人が知っているでしようか。

東京の原地形、原景觀は、東京に  
住む人々の意識の中からも消え去ろ  
うとしている私には、そう思えて  
ならないのです。

私は、このようなことを思いながら、東京の原地形、原景觀を多くの  
人たちに知つてもらいたい、そこから何  
かを感じ取つてもらう、東京の現在  
や未来について問題意識をもつても  
らう—そういう術はないだろかと  
考へたわけでござります。

## 江戸の都市景観を再現する

私が注目したのは、やはり江戸時  
代です。江戸時代には、絵図といえ  
ども、当時の様子を知る手掛かりと

なる地図が整備されています。伊能  
忠敬の全国測量の開始は寛政十二  
(一八〇〇)年です。江戸時代の後期

には、かなり精度の高い地図が作ら  
れていたであろうことはご想像いた  
だけると思います。

江戸時代であれば、都市整備の多  
くを地形に依存するよりなかつた時  
代、市民生活の潤いや憩いを自然や  
地形に求めるよりなかつた時代へと  
想いを馳せることもできます。

私は、江戸時代の地図、すなわち  
絵図を使って、江戸の都市景觀をコ  
ンピュータ上にビジュアルに再現で  
きないかと考えました。

江戸の人々はどのような景觀の中  
で生活していたのか、いかなる景觀  
に楽しみを見出していたのか、その  
景觀を構成した地形要素は何であつ  
たのか。多くの人々が、東京の原景  
觀を探り、未来のあるべき姿を語り  
合えるような、そんな情報システム  
を作りたいと思つたのです。

工学者である私が、なぜ、今日の  
テーマのような歴史研究に取り組ん  
でいるのか、その意味を少しご理解  
いただけたかもしれません。

さて、東京の原地形、原景觀を探  
るということであれば、広重や北斎  
の描いた浮世絵の風景画を参考にす  
ればよいのではないかと思われる方が

いらっしゃると思います。

その通りです。特に、広重の風景  
画は、北斎に比べて写実性が高いの  
で、江戸の地形や景觀をかなり詳し  
く知ることができます。

広重の名所江戸百景などを見ます  
と、富士山や江戸湾が江戸の都市景  
觀の重要な要素であったことを思い  
知らせてくれます。また、山の手の  
山あり、谷ありの地形や、下町の大  
川や掘割の水辺が創り出した美しい  
景觀を幾つも見ることができます。  
地形に逆らうことなく、これを都市  
整備や景觀形成のためにうまく使う  
という、先人の知恵を随所に垣間見  
ることができます。  
わが国が、広重という偉大な芸術  
家をもつたことは、大変幸運なこと  
であつたとつくづく思います。  
しかしながら、広重が描いた風景  
画には限界もあります。言うまでも  
なく、広重に問題があるといふので  
なく、江戸の地形や景觀を探りたい  
という私の目的に対しても限界があ  
るということです。

何が限界かと言えば、まず、広重  
の描いた江戸の風景は、言うまでも  
無く、きわめて断片的であり、限定  
的な数しかありません。写真ではな  
く、あくまで絵ですから、そこに描  
かれる地物や、その位置は正確であ

る保証はありません。

また、江戸名所、東都名所といつたように、ほとんどは名所を描いております。浮世絵の風景画は、参勤交代や仕事、旅行で江戸に出てきた人たちが郷里への土産としたものですから当然です。現在で言えば、絵葉書のようなものです。

いま、東京の絵葉書は、観光名所を中心にたくさん刊行されておりましたが、もし二百年、三百年後の私たちの子孫が、いまの東京の絵葉書でもって、いまの東京の都市景観を考察能するに違ひありません。

私が再現したいと思っているのは、自分の住んでいる場所の江戸時代の景観であったり、自分が通勤、通学する途中の道の江戸時代の景観であつたりなのです。誰もが、各自の関心に基づいて場所や見る方向を指定すれば、即座に江戸時代の景観を知ることができるように、そういう情報システムを作りたいのです。

そこから、江戸の景観形成に果たした地形の役割を浮かび上がらせたのです。多くの人々が、都市整備における地形のもつ意味の大きさを確認し、そして、忘れかけてしまった東京の根源的な個性を想い起こす

契機としたいたと思うのです。

## 江戸絵図の再生

ここからしばらく、私の研究室が取り組んでいる「江戸の都市景観を取り組んでいる「江戸の都市景観をコンピュータで再現する」という仕事の一端を紹介して参ります。江戸を対象にしていますが、お話しす

方法論は、城下町など、絵図が残っている都市であれば、どの都市にでも応用できます。

私たちが主に用いた江戸の絵図は、天保十四（一八四三）年に出版された「天保御江戸絵図」（以後、天保図）という地図です（図1）。ちなみに、天保時代は広重の生きた時代とも

致します。

江戸城を中心に七キロ四方くらいが描かれています。敷地割が記され、土地利用が示されています。大名屋敷、旗本屋敷、組屋敷、寺社、町人地などが分かれています。大名屋敷につ

いては、上屋敷、中屋敷、下屋敷の違いも分かれています。

ご存知のように、江戸の街並みをコンピュータ・グラフィクス（CG）で再現することなど、今では珍しくありません。江戸情緒溢れるCGがたくさん作られ、テレビや雑誌、書籍で紹介されています。

天保図から土地利用が読み取れままでの、そこに、それぞれの土地利用に合った建物を置いていけば、江戸の都市景観を大雑把に再現するCGが完成します。大都市・江戸の街並みの雰囲気を味わう目的であれば、このようなCGで十分です。しかし、私たちの目的には、このような方法では不十分なのです。

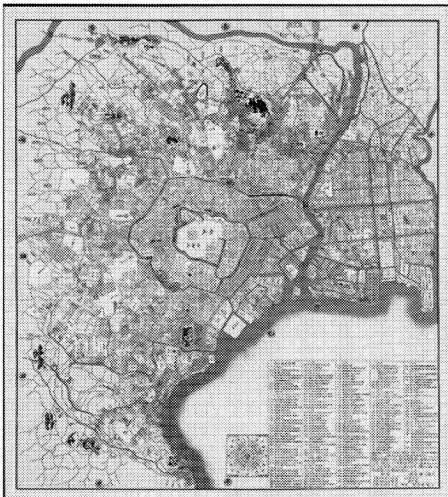


図1 天保御江戸絵図 出典：人文社

戸の都市景観を形成した重要な要素として、富士山や江戸湾などの遠地形を挙げることができます。筑波山なども、江戸から眺望することができます。

江戸の景観再現においては、これらの遠地形を正確に表現する必要があり、絵図には高い幾何精度が要求されるのです。例えば、江戸の街路には、景観に配慮して、街路の延長線上に富士山や筑波山を配するよう設計されたと言われているものがたくさんあります。いわゆる「山当て」による街路設計です。

具体的な例を一つ紹介します。図2は、広重の名所江戸百景の「する賀てふ」（駿河町）です。この通りの両側にある大店が呉服店の越後屋です。ご存知のように、現在では、向かって左側が日本橋三越ですし、右側が、交詢社が先頭まで仮移転していた三井本館です。

街路の延長線上に富士山がそびえています。日本橋の北側の地域は、東西方向の街路は富士山への「山当て」によつて設計されたと言われています。日本橋の北側の地域は、当時、江戸の中心でありました。このように、天保図に描かれる街路の方

で触れましたように、江戸の都市景観を形成した重要な要素として、富士山や江戸湾などの遠地形を挙げることができます。筑波山なども、江戸から眺望することができます。

第一の問題は天保図の幾何的な精度に関することです。

広重の風景画のところ

で触れましたように、江戸の都市景観を形成した重要な要素として、富士山や江戸湾などの遠地形を挙げることができます。筑波山なども、江戸から眺望することができます。

図2 名所江戸百景「する質てふ」  
出典：「廣重の大江戸名所百景散歩」（人文社）



ので、地図としては当たり前のことであります。しかし、街路の景観を再現する際には大きな問題です。私たちも、当時の沾券図などの史料を用いて街路幅の補正を行いました。

### 明治時代の地形を探る

先ほど、江戸時代後期であれば、地図もかなり正確であると話しました。一般論としては、その通りな

ですが、残念ながら、天保図に限らず、江戸時代の絵図には、「山當て」のような景観の再現を可能にするだけの幾何的な精度はありません。

そこで、天保図のように精度の低い江戸絵図を現代の地図に重ね合わせられるように幾何補正が必要があります。詳細は省きますが、江戸城の城郭、堀割、神社仏閣など、江戸時代から現代まで同じ位置にある技術を開発しました。

その他、天保図に示される街路の幅も正確ではありません。実際より幅が大きく描かれています。現在の地図でも街路幅は誇張されています

天保図の第一の問題は地形に関するところでした。江戸の地形が景観形成に果たしていた役割を考察するためには、当時の地形を知る必要があります。しかし、江戸の絵図には致命的な問題があります。等高線が描かれていないのです。等高線による地形表現が西洋からわが国に導入されたのは明治時代になつてからなんです。

そこで、明治時代のなるべく早い時期の地形図に頼るという方法しかありません。私たちは、「五千分一東京測量原図」（明治十九～二十年）

という地図を利用しました。標高点が高密度に配置され、二メートル間隔の等高線が描かれた地図です。こ

り、データベース化しました。

この地形データベースから作成した5mグリッドの標高図を図3に示します。真っ黒な部分は海や河川の水域です。地形の起伏に富んだ山の手の様子が伺えます。また、幕末期から明治時代の初期、東京は西欧人から「東洋のベニス」と形容されています。手の様子が伺えます。また、幕末期から明治時代の初期、東京は西欧人から「東洋のベニス」と形容されています。手の様子が伺えます。また、幕末期

から明治時代の初期、東京は西欧人から「東洋のベニス」と形容されています。手の様子が伺えます。また、幕末期

から明治時代の初期、東京は西欧人から「東洋のベニス」と形容されています。手の様子が伺えます。また、幕末期から明治時代の初期、東京は西欧人から「東洋のベニス」と形容されています。手の様子が伺えます。また、幕末期

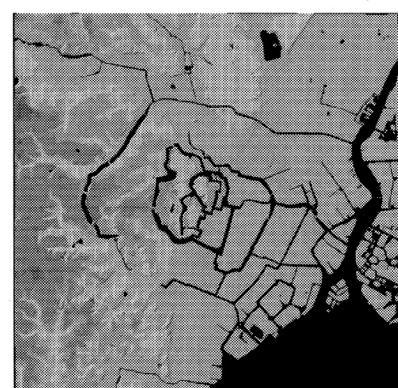


図3 明治一九年～二十年当時の東京の地形  
5 m grid  
■ 0-1m  
■ 1-5m  
■ 5-10m  
■ 10-15m  
■ 15-20m  
■ 20-25m  
■ 25-30m  
■ 30-35m  
■ 35-40m

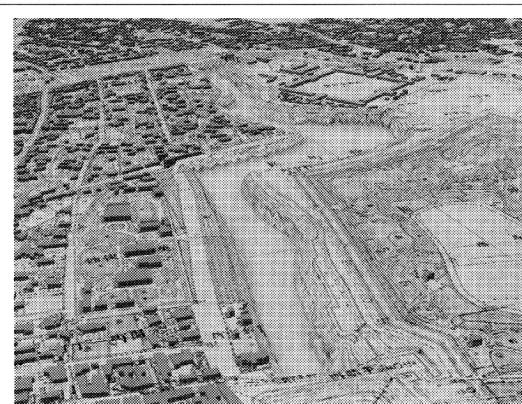


図4 数値地形データを利用した五千分一東京測量原図の立体表現

作成が始まった頃は、わが国の軍制はフランス式でした。地図作成は陸軍の仕事でしたから、フランス式の地図が作られたのです。

それが地図作成の途中で、山形有朋や桂太郎が中心になって、わが国の軍制をドイツ式に変えます。その結果、この地図はドイツ式のモノクロ表現の地図に書き改められ、皇居も白塗りにされ、それが刊行されました。この地図が測量原図と呼ばれる意味はこういうことです。

要するに、この地図は幻の地図なのです。それが、どなたかの、恐らく多くの方々の幾多のご苦労があったのだと思いますが、当時の陸軍によって破棄されることもなく、米軍に接収されることもなく、戦後、地理院に引き継がれ無事に保管されていました。最大級の文化財であると私は思います。複製版が出版されており、私たちが利用したのも、もちろん、その複製版です。

話が脱線してしまいましたが、こうして、幾何的に歪んでいた天保図が補正され、そこに、明治時代の地形図に基づいて等高線が描かれました。江戸の景観を再現する準備が一応整つたことになります。

## 現代に蘇る江戸の景観

私たちが再現した江戸の景観の一  
部をご紹介したいと思います。参考  
のため、現在の景観（昨年夏の撮影）  
とともに示しましょう。

図5 江戸湾を望む街並みの景観  
(現在の財務省と外務省の間の通り  
から)

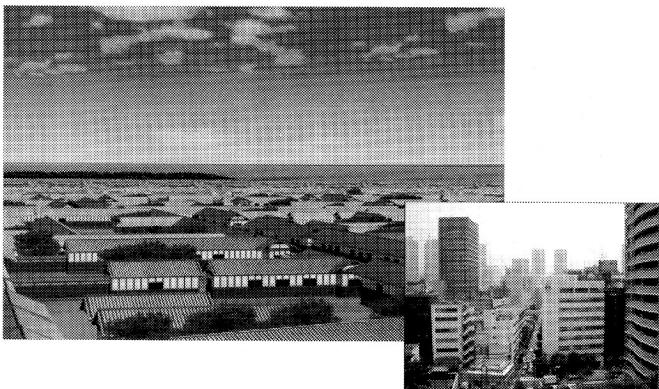
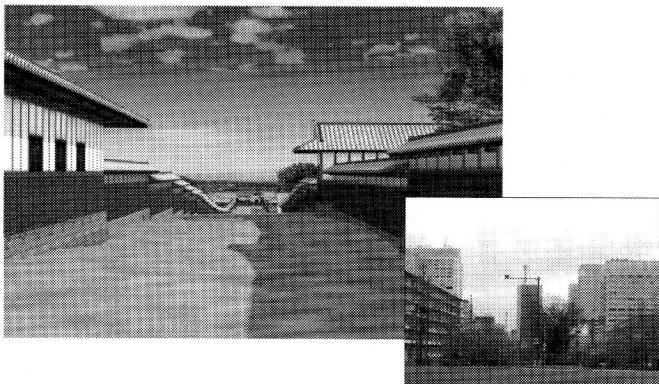


図6 愛宕山から江戸湾を望む景観  
(現在の愛宕山から江戸湾を望む景観)

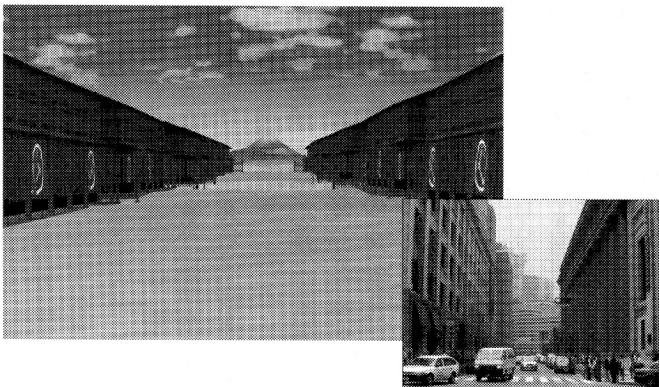


図7 富士山を望む街並みの景観  
(現在の日本橋・三越あたりから)

ていた坂です。江戸時代、明治時代には江戸湾、東京湾を望むことができました。もちろん、現在は東京湾を見るることはできません。

財務省と外務省の間の坂です。わが国を代表するこの土地から、今もし、東京湾を望むことができたら、どんなに魅力的でしょうか。

図6は、港区の愛宕山から江戸湾を望む景観です。愛宕山は東京区部

有数の「山」です。三等三角点があ

い廣がる美しい江戸の街並みを見て、江戸城の無血開城に向けて合意に達したと言われています。

今では、東京湾はもちろん、直近

す。江戸時代には、浜離宮越しに江戸湾が広がって見えていました。愛宕山は、江戸市中が見渡せるという貴重な眺望場でもありました。多分に伝説的ですが、勝海舟と西郷隆盛は、この愛宕山で会い、眼下に

す。江戸時代には、浜離宮越しに江戸城の無血開城に向けて合意に達したと言われています。

のビルによって眺望すらままならない場所になってしまった。

図7は、先ほどご紹介しました、広重の駿河町の図に描かれた景観の再現です。江戸時代、この街路から確かに富士山が見えたのです。

この再現図は、カメラの焦点距離七十五ミリで描いています。このくらいの焦点距離が人間の見る感じに近いのです。図2と比べて見ましよう。広重による富士山の誇張

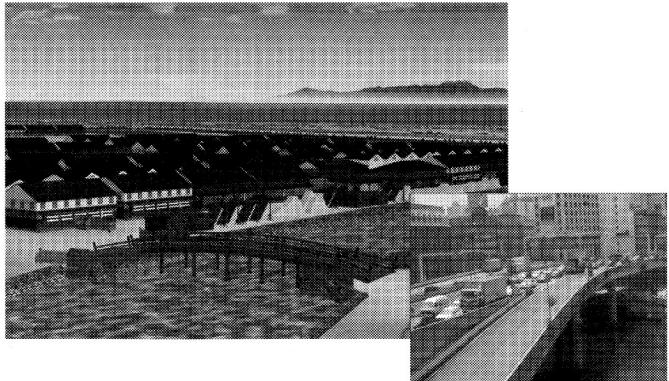


図8 日本橋と富士山を望む鳥瞰的な景観

的な表現が印象的です。

図8は、日本橋と富士山を鳥瞰的に望む景観です。いま、いろいろと再開発の提案がなされている日本橋周辺です。ご存知の通り、日本橋を覆うように首都高速道路が建設されたのは、昭和三十九年の東京オリンピックの直前であります。江戸橋から日本橋方向を望む景観です。遠くに富士山を望みます。このあた

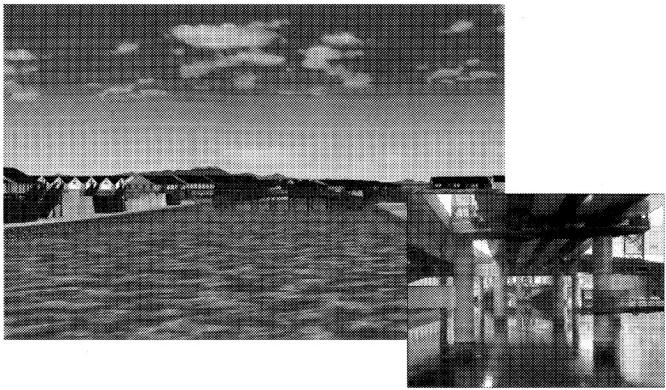


図9 江戸橋から日本橋を望む景観

りは、もちろん当時の日本の中心地であり、魚河岸がありました。江戸橋を往来する人々は、活気溢れる日本橋や魚河岸と霊峰富士のコントラストを楽しんだことでしょう。

今の写真を見ますと情けなくなりますね。醜悪と言つてもよい景観に変わり果ててしましました。以上、幾つかご紹介しましたが、東京が失ったものはあまりに大きいと言ふしかありません。

先ほど、私の目標は江戸名所の景観再現ではないと申し上げましたが、今日ご紹介しましたのは、結局のところ、名所的な場所ばかりになつてしましました。私たちの仕事は現在進行形で、現段階でご紹介できるのが、まだこの程度ということです。ごめんなさい。

### 東京の真の再生に向けて

近年、「都市再生」のスローガンのもとに、多種多様な土地政策が展開されています。

土地情報の整備や公開等による土地市場の整備、容積率や土地利用規制の緩和、土地関係税の軽減措置、不動産の証券化、等々です。これは多くの土地政策が同時並行的に実施されたことは過去にも例がないの

ではないでしょうか。

確かに、土地市場が整備され、税率の軽減措置があれば、土地取引の誘因となり、規制緩和によって市場原理に任せれば、土地の高度利用が進んでいきます。結果として、地価も上がり、不良債権の解消にも貢献しますね。醜悪と言つてもよい景観に変わり果ててしましました。

以上、幾つかご紹介しましたが、東京が失ったものはあまりに大きいと言ふしかありません。

先ほど、私の目標は江戸名所の景観再現ではないと申し上げましたが、今日ご紹介しましたのは、結局のところ、名所的な場所ばかりになつてしましました。私たちの仕事は現在進行形で、現段階でご紹介できるのが、まだこの程度ということです。ごめんなさい。

しかし、このような土地の流動化や都市の活性化、それが、すなわち「都市再生」であるかと言えば、決してそうではないでしょう。

都市が生まれ変わること、都市の市民が、その街に住んでよかつたと真に思えるような都市に生まれ変わること、他の都市や外国から訪ねる人々が、また来てみたい、そこに住んで見たいと思えるような都市に生まれ変わること、これが本当の都市再生ではないでしょうか。

いまの「都市再生」論議には、どのような都市に生まれ変わるのが、例えば、五十年後、百年後の東京はどうあるべきか、という議論が足りないよう思えてなりません。

最近、今日のように、江戸時代の富士山や江戸湾の眺望の話をしますと、「では、今の高層ビルを全部壊せ

というつもりですか。そういう無茶な提案をするつもりですか」などと言われことがあります。

もちろん、そんな提案をするつもりはありません。高層化、立体化する大都市は、それはそれで魅力的ですし、それでなければ大都市の経済活動は維持できません。

これを認めた上で、前提とした上で、それでもなお、都市が守るべきもの、東京が守るべきものとは何であるか——このことを、いま考える必要がある、と言いたいのです。

もし、東京のそれが富士山の景観であれば、もし、それが東京湾の眺望であり、山の手の変化に富む地形の景観であれば、それを現代の東京と調和させながら、少しでも蘇らすべきではないでしょうか。

東京から富士山の景観は失われてしまつたと言われます。実際、「富士見坂」の名をもつ坂で、いまもつて富士山を眺望できる坂は都心部からはほとんど消え去りました。

しかし、少し妄想、視点をえてみましょう。東京にだって、富士見の名所はまだまだ数多く残つています。東京タワーや東京都庁、最近では六本木ヒルズなどが有名ですが、これだけではありません。

私は文京区に住んでいますが、区

役所のビル（文京シビックセンター）に展望台があり、富士山が綺麗に見えます。しかも、新宿副都心の高層ビルとのコントラスト的な景観が非

常に見事なんです。毎日、多くの人が訪れています。しかし、この富士

山の景観は、その視線方向に高層ビルが建つてしまえば、即刻、失われてしまします。たつた一つのビルに

よつて、眺望、景観は失われるのです。わが国には、眺望を保護する法

律はありません。来月施行されます

景観法にも、眺望権の保護に関する条文はありません。

東京の各区に一、二箇所でよいか

ら、富士見の名所を指定し、そこか

らの景観だけでも死守できないもの

でしようか。いや、本音を言えば、

もつと前向きに、東京のど真ん中に、

富士山を眺望できる公園を作ろうで

はないか、富士山を「山当て」にし

た目抜き通りを作ろうではないか、

と申し上げたいのです。

東京湾の眺望だって同じすし、山の手の地形の起伏だって同じことであります。東京湾の美しい眺望場を数多く作つていくべきだし、山の手の地形の起伏を実感できる良好な空間を増やしていくべきでしょう。

富士見坂、潮見坂など、地形と関

坂だけに絞つてもよいから、電線類を地中化して、徹底的に景観を保全、发展させていくことはできないでしょうか。これだけでも、東京のイメージが一変すると思います。

私が尊敬しています歴史地理学の研究者に、京都大学教授であった足利健亮先生（故人）がいます。先生がN.H.K.の人間大学であつたかと思

いますが、「景観から歴史を読む」という講座で、次のようなお話をされ

ていたことを思い出します。

家康が江戸に居城を構えた理由に関する考察です。ご存知のように、

家康の関八州への領地替えは秀吉の命令であつたわけですが、鎌倉でも、小田原でもなく、江戸にした理由は何かということです。足利先生が言わわれるには、家康ほどの大大名が、秀吉に命令されて、仕方なく江戸を選んだとは思えない。それでは、家臣が納得しないだろうと言うのです。

秀吉なりの何らかの思想によるものであろうと考察されるのです。

私は、このお話の中に、家康の都

市建設への確かな思想を感じましたし、その思想が富士見と潮見という

地形景観に結集していることに大きな喜びと希望を感じました。

富士山も東京湾も、そして山の手の地形も、すべて大自然が与えてくれた贈り物です。東京は、景観に対して大きな夢の持てる、そういう恵まれた大都会なのです。このことだけは忘れてはならないでしょ。

百年前から、いつ殺されるか分からない境遇で育ちます。

それは何かと言いますと、端的に言えば、潮見（汐見）と富士見などの名前は幼少期から、いつ殺さ

れるか分からない境遇で育ちます。

死を見

て生きてきたわけです。そして、戦国武将によくあることです。

が、「不死身」を目指すのです。駿府最後に、都市整備における、歴史

に育つた家康は、富士山をこのほど愛していましたと言います。「不死身」「富士見」というように捉えていたのではないかということです。

関八州で、潮見と富士見の条件を満たし、かつ、大城下町を築けるだけの広がりと、湊を築くための地形をもつ土地が江戸であつたというのです。小田原からは富士山は見えませんし、鎌倉では狭すぎるというのです。江戸しかなかつたのです。

私が勝手に解釈している面もあるかもしれません、足利先生は大体このようなことを言わされました。

私は、このお話の中に、家康の都

市建設への確かな思想を感じましたし、その思想が富士見と潮見という

地形景観に結集していることに大きな喜びと希望を感じました。

富士山も東京湾も、そして山の手の地形も、すべて大自然が与えてくれた贈り物です。東京は、景観に対して大きな夢の持てる、そういう恵まれた大都會なのです。このことだけは忘れてはならないでしょ。

百年前から、いつ殺され

るか分からない境遇で育ちます。

死を見

て生きてきたわけです。そして、戦国武将によくあることです。

が、「不死身」を目指すのです。

おわりに

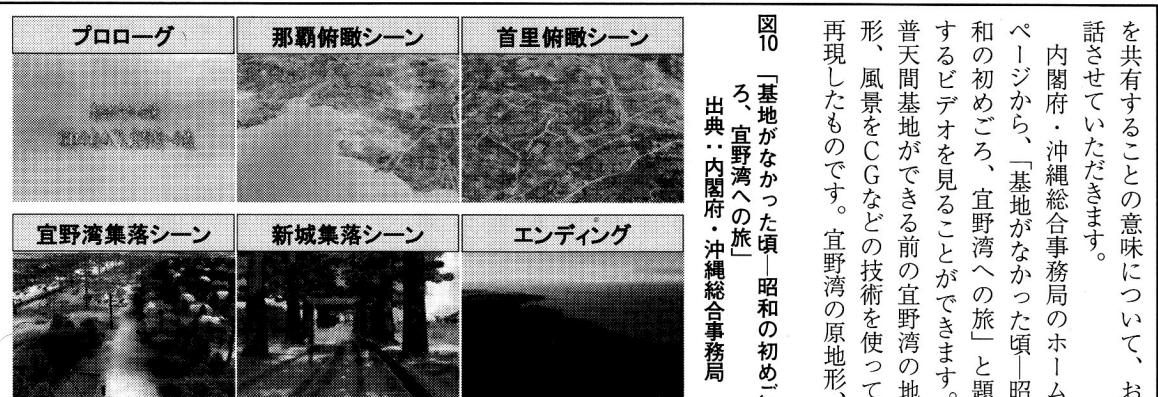


図10

「基地がなかつた頃—昭和の初め—  
宜野湾への旅」  
出典：内閣府・沖縄総合事務局

を共有することの意味について、お話をさせていただきます。

内閣府・沖縄総合事務局のホームページから、「基地がなかつた頃—昭和の初めごろ、宜野湾への旅」と題するビデオを見るることができます。普天間基地ができる前の宜野湾の地形、風景をCGなどの技術を使って再現したものです。宜野湾の原地形、再現したものです。宜野湾の原地形、

平良とみさんの情緒豊かな語り口で紹介されています。図10に、その断片的な画像を示します（講演の際にはビデオを上映しました）。

この映像は、沖縄総合事務局の「昔・普天間まちなみ再現検討委員会」の活動成果に基づくものです。大変光栄なことですが、私が委員長を務めさせていただきました。

普天間基地の地権者の方々は非常に多く、既に世代が代わられている世帯も多くあります。返還後の普天間のまちづくりには、様々な方が参加することになるでしょう。地権者の方々はもとより、市民、県民の皆様、県や国の行政機関の方々、政治家、デベロッパー、学識経験者などなどです。この方々は、世代も違えば、出身地や生活環境も異なります。経験や知識、そして各自の価値観も至極多様でありましょう。

これら多くの人々が、普天間の歴史を共有し、相互に信頼関係をもつて未来を語り合うことは容易なことではありません。私たちの問題意識も、まさにこの点にありました。普天間の昔、米軍に接收される前の普天間の地域と生活を再現しようと思

いました。これにより、多くの人々が普天間の歴史を知り、それを共有するための助けとしたい、そして、内閣府・沖縄総合事務局のホームページから、「基地がなかつた頃—昭和の初め—宜野湾への旅」と題するビデオを見ることがあります。普天間基地ができる前の宜野湾の地形、風景をCGなどの技術を使って再現したものです。宜野湾の原地形、

平良とみさんの情緒豊かな語り口で紹介されています。図10に、その断片的な画像を示します（講演の際にはビデオを上映しました）。

この映像は、沖縄総合事務局の「昔・普天間まちなみ再現検討委員会」の活動成果に基づくものです。大変光栄なことですが、私が委員長を務めさせていただきました。

普天間基地の地権者の方々は非常に多く、既に世代が代わられている世帯も多くあります。返還後の普天間のまちづくりには、様々な方が参加することになるでしょう。地権者の方々はもとより、市民、県民の皆様、県や国の行政機関の方々、政治家、デベロッパー、学識経験者などなどです。この方々は、世代も違えば、出身地や生活環境も異なります。経験や知識、そして各自の価値観も至極多様でありましょう。

これら多くの人々が、普天間の歴史を共有し、相互に信頼関係をもつて未来を語り合うことは容易なことではありません。私たちの問題意識も、まさにこの点にありました。普天間の昔、米軍に接收される前の普天間の地域と生活を再現しようと思

いました。これにより、多くの人々が普天間の歴史を知り、それを共有するための助けとしたい、そして、内閣府・沖縄総合事務局のホームページから、「基地がなかつた頃—昭和の初め—宜野湾への旅」と題するビデオを見ることがあります。普天間基地ができる前の宜野湾の地形、風景をCGなどの技術を使って再現したものです。宜野湾の原地形、

平良とみさんの情緒豊かな語り口で紹介されています。図10に、その断片的な画像を示します（講演の際にはビデオを上映しました）。

この映像は、沖縄総合事務局の「昔・普天間まちなみ再現検討委員会」の活動成果に基づくものです。大変光栄なことですが、私が委員長を務めさせていただきました。

普天間基地の地権者の方々は非常に多く、既に世代が代わられている世帯も多くあります。返還後の普天間のまちづくりには、様々な方が参加することになるでしょう。地権者の方々はもとより、市民、県民の皆様、県や国の行政機関の方々、政治家、デベロッパー、学識経験者などなどです。この方々は、世代も違えば、出身地や生活環境も異なります。経験や知識、そして各自の価値観も至極多様でありましょう。

これら多くの人々が、普天間の歴史を共有し、相互に信頼関係をもつて未来を語り合うことは容易なことではありません。私たちの問題意識も、まさにこの点にありました。普天間の昔、米軍に接收される前の普天間の地域と生活を再現しようと思

いました。これにより、多くの人々が普天間の歴史を知り、それを共有するための助けとしたい、そして、内閣府・沖縄総合事務局のホームページから、「基地がなかつた頃—昭和の初め—宜野湾への旅」と題するビデオを見ることがあります。普天間基地ができる前の宜野湾の地形、風景をCGなどの技術を使って再現したものです。宜野湾の原地形、